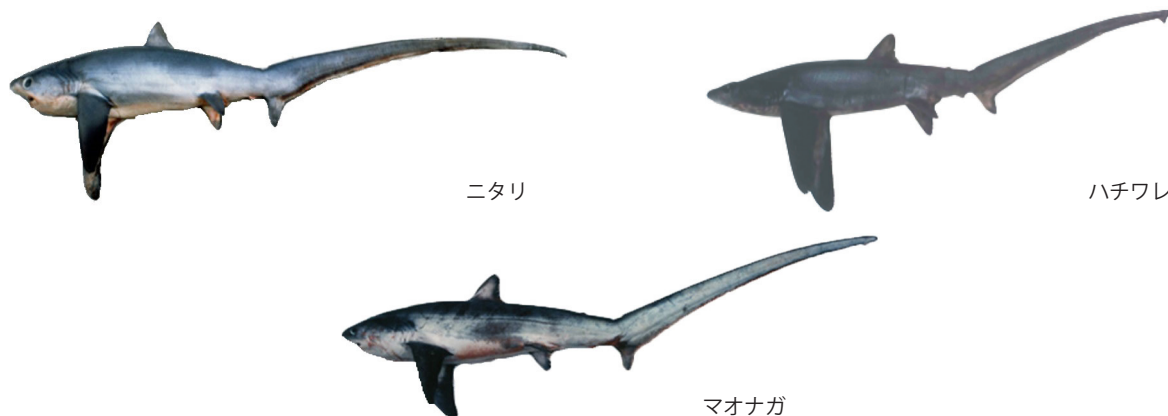


オナガザメ類 全水域

ニタリ (Pelagic thresher, *Alopias pelagicus*)

ハチワレ (Bigeye Thresher, *Alopias superciliosus*)

マオナガ (Thresher shark, *Alopias vulpinus*)



最近の動き

2015 年、太平洋共同体事務局 (SPC) の専門家グループによって中西部太平洋水域の漁業データを用いたオナガザメ類の資源状態の傾向分析が行われ、中西部太平洋まぐろ類委員会 (WCPFC) 第 11 回科学委員会において発表された。2016 年には、国際連合食糧農業機構 (FAO) による Areas Beyond National Jurisdiction (ABNJ) プロジェクトの一部として、太平洋に棲息するハチワレの資源評価が行われる予定である。

利用・用途

肉は生鮮食品や燻製、塩干物として消費される。鰭はフカヒレスープの原料、皮は革製品の材料として利用されるほか、肝臓からはビタミン類が抽出される。

漁業の概要

日本の主要漁港におけるまぐろはえ縄等によるさめ類の種別水揚げ量は、水産庁による委託事業「日本周辺高度回遊性魚類資源調査委託事業 (平成 12 ～ 18 年度)」及び「日本周辺国際魚類資源調査 (平成 19 年度～)」によって調査が行われている。1992 ～ 2014 年におけるオナガザメ類の総水揚げ量は 16 ～ 706 トンで、その内はえ縄による水揚げ量が 109 ～ 591 トンと大部分を占めており (1992 ～ 2013 年: オナガザメ類総水揚げ量の約 89%)、流し網が続いて多かった (オナガザメ類総水揚げ量の約 10%)。時系列で見ると、1992 年の 706 トンをピークとして、水揚げ量は緩やかに減少傾向を続けているが、2014 年の水揚げ量は 153 トンと前年を若干上回っている (図 1)。水揚げの多くを占めるはえ縄漁業のうち、近海はえ縄漁業と沿岸はえ縄漁業の隻数を年別に集計した結果、調査期間を通じて減少傾向を示しており、努力量の減少が水揚げ量の減少の一因である可能性が考えられる

(図 1)。さめ類の合計値に占めるオナガザメ類の割合 (2002 ～ 2013 年) は 0.1 ～ 2.4% であった。

米国西岸では、マオナガを対象とした流し網漁業や遊漁が存在し、流し網漁業では 1980 年代初期には 1,800 トンが水揚げされていたが、漁獲対象の転換や資源保護のための規制によって、2008 ～ 2009 年には 200 トン以下となっている。豪州においては、オナガザメ類は遊漁の対象となる他、2011 年初期まではインド洋に面する国々では地域的に消費され、欧州のマーケットでも食用として流通していたことが知られている (IOTC 2015a,b)。

生物学的特性

【分布】

ニタリは主に熱帯～亜熱帯の外洋の表層域に分布するが、時に沿岸近くに出現することもある。ハチワレは世界の熱帯～温帯の外洋域及び沿岸域に分布する。マオナガは、熱帯～温帯の冷水域に広く分布するが、主な出現は温帯域であり、沿岸性が強いとされる (図 2)。鉛直分布については、ニタリは表層～水深 152 m、ハチワレが最も深く表層から少な

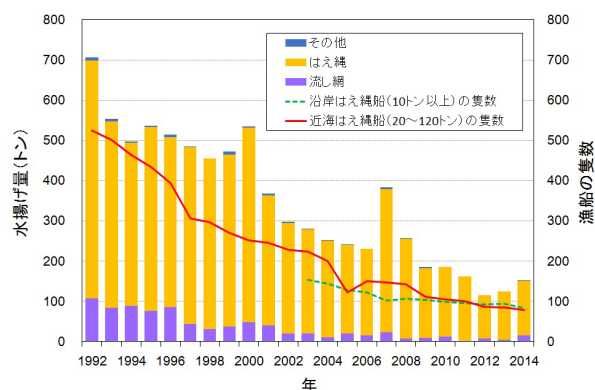


図 1. 日本の主要漁港へのオナガザメ類の水揚げ量

くとも水深 500 m (多くの場合、100 m 以深)、マオナガは表層～水深 366 m (多くの場合、表層に分布) と報告されている (Compagno 2001)。はえ縄漁具を日中に浸漬した調査では、ハチワレでは水深 240 ～ 360 m、水温 10 ～ 16℃、マオナガでは、水深 160 ～ 240 m、水温 18 ～ 20℃ の環境で漁獲率が高いことが示されている (Cao *et al.* 2011)。

メキシコ湾及び太平洋で行われたポップアップアーカイバルタグ及び超音波発信器による行動研究によれば、ハチワレの遊泳深度 (図 3) は成長段階によらず、夜間 (10 ～ 130 m) よりも日中 (200 ～ 500 m) の方が深いこと (Nakano *et al.* 2003, Weng and Block 2004)、これに伴い分布水温は夜間 (メキシコ湾、ハワイ: 20 ～ 26℃) の方が日中 (メキシコ湾: 6 ～ 12℃、ハワイ: 6 ～ 26℃) よりも高いことが示されている (Weng and Block 2004)。

カリフォルニア南部で行われたアーカイバルタグ及び超音波発信器による行動研究によれば、マオナガは大陸棚上の浅い海域を避け、沖合の深い場所を好み、日中は水温躍層の下もしくは躍層の上部を遊泳し夜間は躍層の上、混合層に留まることが明らかになった (Cartamil *et al.* 2010a, Cartamil

et al. 2011)。また、未成魚については、多くの時間を大陸棚上で過ごし、個体によっては生息場所に高い固着性を示すこと、鉛直的には表層 20 m に分布に限られること、昼の分布水深は夜よりも深いことがわかっている (Cartamil *et al.* 2010b)。

太平洋における日本のはえ縄調査データの解析によれば、ハチワレの CPUE は熱帯域 (北緯 10 ～ 15 度、南緯 5 ～ 10 度) で高いこと、低緯度では幼魚や未成魚が多く出現し高緯度になるほど大型個体の割合が高くなることが示唆されている (Matsunaga and Yokawa 2013)。インド洋においても同様の傾向が見られる上、海域や体長階級によって性比が異なることが示されている (Fernandez-Carvalho *et al.* 2015a)。マオナガについても、インド洋北西部や北米西岸において水平・鉛直方向における性的棲み分けの存在が指摘されている (Compagno 2001)。

系群構造に関しては殆ど研究が行われていないが、近年のミトコンドリア DNA 及びマイクロサテライト (核 DNA) を用いた研究によれば、ニタリは太平洋の東部と西部で大きく遺伝的組成が異なることが明らかになっている (Cardenosa *et al.* 2014)。

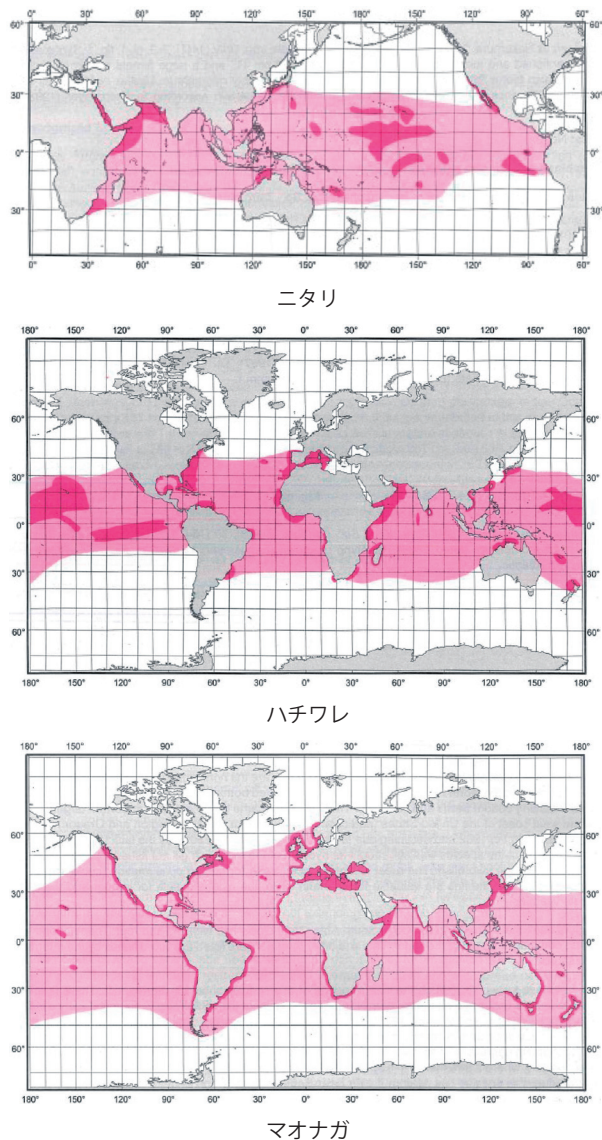


図 2. オナガザメ類の分布 (Compagno 2001 より引用)

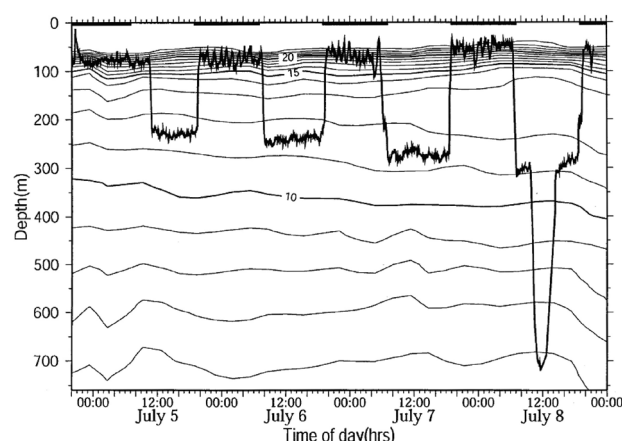


図 3. ハチワレの日周鉛直移動 (Nakano *et al.* 2003 より引用) 縦軸が遊泳水深、横軸は日にちと時刻を示す。図中のコンターは水温の等深線を示す。

【産卵・回遊】

ニタリ、ハチワレ、マオナガの繁殖様式はいずれも卵食・共食い型の非胎盤型胎生 (Otake and Mizue 1981, Gilmore 1983, Moreno and Moron 1992, Chen *et al.* 1997, Liu *et al.* 1999, Natanson and Gervelis 2013) である。産仔数の範囲は、ニタリが 2 尾 (Otake and Mizue 1981, Liu *et al.* 1999)、ハチワレが 2 尾 (最頻値、レンジは 2 ～ 4 個体) (Moreno and Moron 1992)、2 尾 (Chen *et al.* 1997)、マオナガが平均 3.7 尾 (Natanson and Gervelis 2013)、4 尾 (Mancini and Amorim 2006) と推定されている (表 1)。出生時の体長は、ニタリが全長 158 ～ 190 cm (Liu *et al.* 1999)、全長 130 ～ 160 cm (Compagno 2001)、ハチワレが全長 100 cm (Moreno and Moron 1992)、135 ～ 140 cm (Chen *et al.* 1997)、マオナガが全長 114 ～ 160 cm (Compagno 2001) で (表 1)、妊娠期間はニタリが

9 か月 (Romero-Caicedo *et al.* 2014)、ハチワレが 12 か月 (Compagno 2001)、マオナガが 9 か月 (Cailliet and Bedford 1983) と推定されている。なお体長について、特に説明がない場合は、尾鰭前長を表す。交尾・出産期及び繁殖周期については、ニタリでは明瞭な交尾・出産期は報告されていないが、妊娠個体が周年観察されていることから、休止期はなく毎年出産している可能性が指摘されている (Liu *et al.* 1999, Romero-Caicedo *et al.* 2014)。ハチワレでは、出産は季節性がなく周年行っていると推定されているが (Chen *et al.* 1997)、東部大西洋では秋～冬期の出産が他の時期に比べて多いと報告されている (Moreno and Moron 1992)。マオナガでは、東部太平洋において夏期 (7～8 月) に交尾後、9 か月の妊娠期間を経て春季 (3～6 月) に出産すると推定されている一方 (Cailliet and Bedford 1983)、大西洋では、5～8 月 (Mancini and Amorim 2006, Natanson and Gervelis 2013) の出産期を経て交尾は秋に行われること、休止期を伴うため出産は毎年行われない可能性が指摘されている (Natanson and Gervelis 2013)。

ハチワレではイベリア半島南西部の沖合 (Moreno and Moron 1992) が、マオナガではカリフォルニア南部など、温帯域の沿岸域 (Compagno 2001, Cartamil *et al.* 2010b) が生育場と考えられている。

マオナガについては、北米西岸の個体群は季節回遊を行うと言われており、春季にバハ・カリフォルニアからカリフォルニア沖に北上し夏の間沿岸域に高密度に分布する。成熟雄は雌よりも北上しブリティッシュコロンビアまで到達するが、未成魚は低水温耐性が弱いためカリフォルニア中央部より北に移動することなく、沿岸域の暖かく水深の浅い場所で多く見られる (Compagno 2001)。

【成長・成熟】

脊椎骨に形成される輪紋から年齢が推定されており、ニタリについては Liu *et al.* (1999) と Drew *et al.* (2015) がそれぞれ台湾近海、インドネシア近海で漁獲された個体について (図 4)、ハチワレについては Liu *et al.* (1998)、Fernandez-Carvalho *et al.* (2011)、Fernandez-Carvalho *et al.* (2015b) がそれぞれ台湾近海、北東大西洋の熱帯域、大西洋全域で漁獲された個体を対象として (図 5)、マオナガについては Smith *et al.* (2008)、Natanson *et al.* (2015) が北東太平洋、北西大西洋で漁獲された個体を対象として (図 6)、成長式を推定している。

成熟体長は、ニタリでは雄が 144.3 cm (Romero-Caicedo *et al.* 2014)、全長 267～276 cm (Liu *et al.* 1999)、雌が 151.4 cm (Romero-Caicedo *et al.* 2014)、全長 282～292

cm (Liu *et al.* 1999)、ハチワレでは、雄が全長 276 cm (Moreno and Moron 1992)、全長 270.1～287.6 cm (Chen *et al.* 1997)、尾叉長 159.2 cm (Fernandez-Carvalho *et al.* 2015a)、雌が全長 332～341.1 cm (Chen *et al.* 1997)、尾叉長 208.6 cm (Fernandez-Carvalho *et al.* 2015a)、マオナガでは、オスが全長 293～311 cm (Smith *et al.* 2008)、尾叉長 181～198 cm (Natanson and Gervelis 2013)、雌が

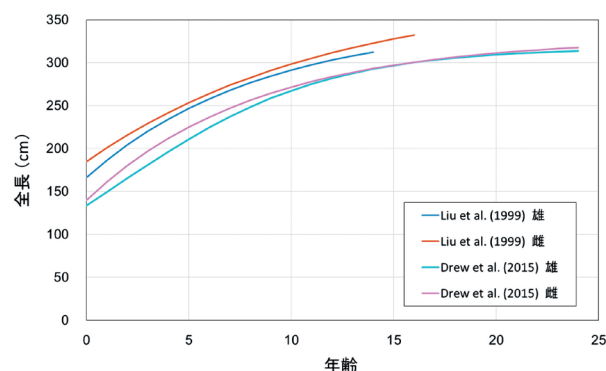


図 4. ニタリの成長式 (Liu *et al.* 1999, Drew *et al.* 2015 より引用)

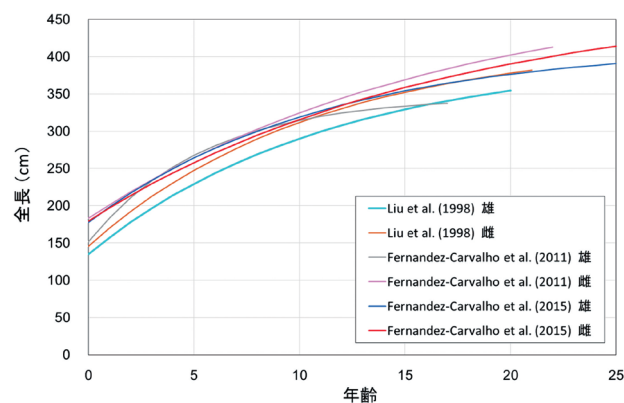


図 5. ハチワレの成長式 (Liu *et al.* 1998, Fernandez-Carvalho *et al.* 2011, 2015b より引用)

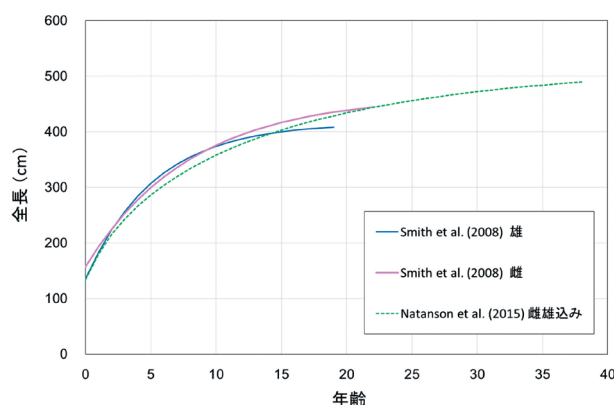


図 6. マオナガの成長式 (Smith *et al.* 2008, Natanson *et al.* 2015 より引用)

表 1. オナガザメ類 3 種の繁殖様式、産仔数、出生時の体長

種名	繁殖様式	産仔数 (平均と範囲)	出生時の体長	出典
ニタリ	非胎盤型胎生、卵食型	2 尾	130～190 cm (全長)	Otake and Mizue (1981) Liu <i>et al.</i> (1999) Compagno (2001)
ハチワレ	非胎盤型胎生、卵食型	2 尾 (2～4 尾)	100 cm (全長) 135～140 cm (尾鰭前長)	Moreno and Moron (1992) Chen <i>et al.</i> (1997)
マオナガ	非胎盤型胎生、卵食型	4 尾 (1～4 尾)	114～160 cm (全長)	Natanson and Gervelis (2013) Mancini and Amorim (2006) Compagno (2001)

表 2. オナガザメ類 3 種の体長測定部位間の換算式

種名	測定部位 (x-y)	換算式	調査海域	出典
ニタリ	PL-TL	雌: $TL=2.34+1.93 \times PL$	太平洋	Liu <i>et al.</i> (1999)
	PL-TL	雄: $TL=2.33+1.89 \times PL$	太平洋	同上
ハチワレ	PL-TL	雌: $TL=15.3+1.81 \times PL$	太平洋	Liu <i>et al.</i> (1998)
	PL-TL	雄: $TL=15.1+1.76 \times PL$	太平洋	同上
	FL-TL	雌: $TL=13.3+1.69 \times FL$	太平洋	同上
	FL-TL	雄: $TL=26.3+1.56 \times FL$	太平洋	同上
	TL-FL	雌雄込み: $FL=4.83+0.58 \times TL$	大西洋	Fernandez-Carvalho <i>et al.</i> (2011)
マオナガ	TL-FL	雌雄込み: $FL=16.466+0.5168 \times TL$	大西洋	Gervelis and Natanson (2013)

全長 303 cm (Smith *et al.* 2008)、尾叉長 208 ～ 224cm (Natanson and Gervelis 2013) と推定されている。成熟年齢は、ニタリでは雄が 7 ～ 8 歳 (Liu *et al.* 1999) ～ 10.4 歳 (Drew *et al.* 2015)、雌が 8.0 ～ 9.2 歳 (Liu *et al.* 1999) ～ 13.2 歳 (Drew *et al.* 2015)、ハチワレでは雄が 9 ～ 10 歳 (Liu *et al.* 1998)、雌が 13.4 歳 (Liu *et al.* 1998)、マオナガでは雄が 4.8 歳 (Smith *et al.* 2008) ～ 8 歳 (Natanson *et al.* 2015)、雌が 5.3 歳 (Smith *et al.* 2008) ～ 13 歳 (Natanson *et al.* 2015) と推定されている。

体長測定部位が研究者によって、尾鰭前長、尾叉長、全長と様々であるので、これまで公表されている測定部位間の換算式を、表 2 に引用する。

資源状態

現在、オナガザメ類の資源水準の推定はどの大洋でも行われていないが、太平洋、大西洋、インド洋において、はえ縄漁業を対象とした生態学的リスク解析が行われている。SPC が行った太平洋の解析結果によれば、オナガザメ類のリスク（脆弱性）は“中程度”と評価されたが (Kirby and Hobday 2007)、大西洋まぐろ類保存国際委員会 (ICCAT) が行った大西洋の結果では、ICCAT 海域で主に漁獲又は混獲される代表的な板鰹類 20 種の中でハチワレは最も脆弱～3 番目（評価方法によって異なる）に脆弱な種であると推定されている (ICCAT 2012)。大西洋の解析では、ハチワレの生産力が他の種に比べて低いとされていることが本種の脆弱性が高いと推定された主な要因と考えられる (Cortés *et al.* 2010)。インド洋まぐろ類委員会 (IOTC) が行ったインド洋の結果も、ハチワレは非常に脆弱な種であることが示唆されている (IOTC 2012)。

この他、SPC の専門家グループによって中西部太平洋水域の漁業データを用いたオナガザメ類の資源状態の傾向分析が行われており、WCPFC 第 11 回科学委員会に報告された最近年の結果では、はえ縄漁業における主な漁獲は東経 170 度以東、南緯 10 度～北緯 20 度で見られること、漁獲物の多くは未成熟個体であること、漁獲率は 1995 ～ 2001 年にかけて増加し、その後 2003 ～ 2011 年にかけてわずかに減少傾向を示し、2012 ～ 2014 年に急激に減少していることが示されている (Rice *et al.* 2015)。また、2016 年には、FAO の ABNJ プロジェクトの一部として、太平洋に棲息するハチワレの資源評価が行われる予定である。

管理方策

現在、ICCAT ハチワレの船上保持禁止措置が (Recommendation 09-07)、IOTC においてオナガザメ類 3 種の船上保持禁止措置 (Resolution 12/09) が施行されている。この他、全てのまぐろ類地域漁業管理機関 (RFMO) において、漁獲されたさめ類の完全利用（頭部、内臓及び皮を除く全ての部位を最初の水揚げ又は転載まで船上で保持すること）及び漁獲データ提出が義務付けられている。加えて、WCPFC では、2014 年の年次会合において、①まぐろ・かじき類を対象とするはえ縄漁業は、ワイヤーリーダー（ワイヤー製の枝縄及びはりす）又はシャークライン（浮き玉又は浮縄に接続された枝縄）のいずれかを使用しないこと、②さめ類を対象とするはえ縄漁業は、漁獲を適切な水準に制限するための措置等を含む管理計画を策定すること、が合意されている。

執筆者

かつお・まぐろユニット

さめ・かじきサブユニット

国際水産資源研究所 かつお・まぐろ資源部

まぐろ漁業資源グループ

仙波 靖子

参考文献

- Cailliet, G. M., and Bedford, D. W. 1983. The biology of three pelagic sharks from California waters, and their emerging fisheries: a review. CALCOFI Rep., Vol. XXIV, 57-69.
- Cao, D. M., Song, L. M., Zhang, Y., Lv, K. K., and Hu, Z. X. 2011. Environmental preferences of *Alopias superciliosus* and *Alopias vulpinus* in waters near the Marshall Islands. New. Zeal. J. Mar. Fresh.. 45(1):103-119.
- Cardenosa, D., Hyde, J., and Caballero, S. 2014. Genetic diversity and population structure of the pelagic thresher shark (*Alopias pelagicus*) in the Pacific Ocean: evidence for two evolutionarily significant units. PLOS ONE 9(10):e110193.
- Cartamil, D., Wegner, N. C., Aalbers, S., Sepulveda, C. A., Baquero, A., and Graham, J. B. 2010a. Diel movement patterns and habitat preferences of the common thresher

- shark (*Alopias vulpinus*) in the Southern California Bight. Mar. Freshwater Res. 61:596-604.
- Cartamil, D., Wegner, N. C., Kacev, D., Ben-aderet, N., Kohin, S., and Graham, J. B. 2010b. Movement pattern and nursery habitat of juvenile thresher sharks *Alopias vulpinus* in the Southern California Bight. Mar. Ecol. Prog. Ser. 404:249-258.
- Cartamil, D.P., Sepulveda, C. A., Wegner, N. C., Aalbers, S. A., Baquero, A., and Graham, J. B. 2011. Archival tagging of subadult and adult common thresher sharks (*Alopias vulpinus*) off the coast of southern California. Mar. Biol. 158:935-944.
- Chen, C. T., Liu, K. M., and Chang, Y. C. 1997. Reproductive biology of the bigeye thresher shark, *Alopias superciliosus* (Lowe, 1839) (Chondrichthyes: Alopiidae), in the northwestern Pacific. Ichthyol. Res. 44(3):228-235.
- Compagno, L. J. V. 2001. FAO species catalog, Vol.4: Sharks of the world; Part 2 – Bullhead, mackerel and carpet sharks. Food and Agricultural Organization of the United Nations. Rome, Italy. 269pp.
- Cortés, E., Arocha, F., Beerkircher, L., Carvalho, F., Domingo, A., Heupel, M., Holtzhausen, H., Santos, M. N., Ribera, M., and Simpfendorfer, C. 2010. Ecological risk assessment of pelagic sharks caught in Atlantic pelagic fisheries. Aquat. Living Resour. 23:25-34.
- Drew, M., White, W. T., Dharmadi, Harry, A. V., and Huveneers, C. 2015. Age, growth and maturity of the pelagic thresher *Alopias pelagicus* and the scalloped hammerhead *Sphyrna lewini*. J. Fish. Biol. 86:333-354.
- Fernandez-Carvalho, J., Coelho, R., Erzini, K., and Santos, M. N. 2011. Age and growth of the bigeye thresher shark, *Alopias superciliosus*, from the pelagic longline fisheries in the tropical northwestern Atlantic Ocean, determined by vertebral band counts. Aquat. Living Resour. 24:359-368.
- Fernandez-Carvalho, J., Coelho, R., Mejuto, J., Cortés, E., Domingo, A., Yokawa, K., Liu, K. M., Garcia-Cortés, B., Forselledo, R., Ohshimo, S., Ramos-Cardelle, A., Tsai, W. P., and Santos, M. N. 2015a. Pan-Atlantic distribution and reproductive biology of the bigeye thresher, *Alopias superciliosus*. Rev. Fish. Biol. Fisheries. 25(3):551-568.
- Fernandez-Carvalho, J., Coelho, R., Erzini, K., and Santos, M. N. 2015b. Modelling age and growth of the bigeye thresher (*Alopias superciliosus*) in the Atlantic Ocean. Fish. Bull. 113:468-481.
- Gervelis, B. J., and Natanson, L. J. 2013. Age and growth of the common thresher shark in the western north Atlantic Ocean. Trans. Am. Fish. Soc. 142:1535-1545.
- Gilmore, R. G. 1983. Observation on the embryos of the longfin mako, *Isurus paucus*, and the bigeye thresher, *Alopias superciliosus*. Copeia 2:375-382.
- ICCAT (International Commission for the Conservation of Atlantic Tunas). 2012. ICCAT Report 2014-2015 (I), Section 8.13, Executive Summary – Sharks. Accessed online at https://www.iccat.int/Documents/SCRS/ExecSum/SHK_EN.pdf
- IOTC (Indian Ocean Tuna Commission). 2012. Report of the Eighth Session of the IOTC Working Party on Ecosystems and Bycatch, Cape Town, South Africa, 17–19 September, 2012. IOTC-2012-WPEB08. Accessed online at <http://www.iotc.org/documents/report-eighth-session-iotc-working-party-ecosystems-and-bycatch>
- IOTC 2015a. Bigeye thresher shark Supporting information. http://iotc.org/sites/default/files/documents/science/species_summaries/english/Bigeye%20thresher%20shark%20Supporting%20Information.pdf
- IOTC 2015b. Pelagic thresher shark Supporting information. http://iotc.org/sites/default/files/documents/science/species_summaries/english/Pelagic%20thresher%20shark%20Supporting%20Information.pdf
- Kirby, D. S., and Hobday, A. 2007. Ecological Risk Assessment for the Effects of Fishing in the Western and Central Pacific Ocean: Productivity-Susceptibility Analysis. Third Scientific Committee Meeting of the Western and Central Pacific Fisheries Commission, Honolulu, USA, 13-24 August 2007. WCPFC-SC3-EB SWG/WP-1. Accessed online at <https://www.wcpfc.int/node/1577>
- Liu, K. M., Chiang, P. J., and Chen, C. T. 1998. Age and growth estimates of the bigeye thresher shark, *Alopias superciliosus*, in northeastern Taiwan waters. Fish. Bull. 96:482-491.
- Liu, K. M., Chen, C. T., Liao, T. H., and Joung, S. J. 1999. Age, growth and reproduction of the pelagic thresher shark, *Alopias pelagicus* in the northwestern Pacific. Copeia. 1:68-74.
- Mancini, P. L., and Amorim, A. F. 2006. Embryos of common thresher shark *Alopias vulpinus* in southern Brazil, south Atlantic ocean. J. Fish. Biol. 69:318-321.
- Matsunaga, H., and Yokawa, K. 2013. Distribution and ecology of bigeye thresher *Alopias superciliosus* in the Pacific Ocean. Fish. Sci. 79:737-748.
- Moreno, J. A., and Moron, J. 1992. Reproductive biology of the bigeye thresher shark, *Alopias superciliosus* (Lowe, 1839). Aust. J. Mar. Freshwater Res. 43:77-86.
- Nakano, H., Matsunaga, H., Okamoto, H., and Okazaki, M. 2003. Acoustic tracking of bigeye thresher shark *Alopias superciliosus* in the eastern Pacific Ocean. Mar. Ecol. Prog. Ser. 265:255-261.
- Natanson, L. J., and Gervelis, B. J. 2013. The reproductive biology of common thresher shark in the western north Atlantic Ocean. Trans. Am. Fish. Soc. 142:1546-1562.
- Natanson, L. J., Hamady, L. L., and Gervelis, B. J. 2015.

Analysis of bomb radiocarbon data for common thresher sharks, *Alopias vulpinus*, in the northwestern Atlantic Ocean with revised growth curves. Environ. Biol. Fish. 99:39-47.

Otake, T., and Mizue, K. 1981. Direct evidence for oophagy in thresher shark, *Alopias pelagicus*. Jpn. J. Ichthyol. 28(2):171-172.

Rice, J., Tremblay-Boyer, L., Scott, R., Hare, S., and Tidd, A. 2015. Analysis of stock status and related indicators for key shark species of the Western Central Pacific Fisheries Commission. Working Paper EB-WP-04, Eleventh Meeting of the Scientific Committee, WCPFC, 5-13 August 2015, Pohnpei, Federated States of Micronesia. Accessed online at <https://www.wcpfc.int/node/21719>

Romeo-Caicedo, A. F., Galvan-Magana, F., and Martinez-Ortiz, J. 2014. Reproduction of the pelagic thresher shark *Alopias pelagicus* in the equatorial Pacific. J. Mar. Biol. Assoc. U. K. 94(7):1501-1507.

Smith, S. E., Rasmussen, R. C., Ramon, D. A., and Cailliet, G. M. 2008. The biology and ecology of thresher sharks (Alopiidae). In Camhi, M. D., Pikitch, E. K., and Babcock, E. A. (eds.) Sharks of the open ocean. Biology, fisheries and conservation. Blackwell Publishing, Oxford, UK.

Weng, K. C., and Block, B. A. 2004. Diel vertical migration of the bigeye thresher shark (*Alopias superciliosus*), a species possessing orbital retia mirabilia. Fish. Bull. 102:221-229.

オナガザメ類（全水域）の資源の現況（要約表）

資 源 水 準	調査中
資 源 動 向	調査中
世 界 の 漁 獲 量 * (最近 5 年間)	9,908 ～ 20,565 トン 平均：15,271 トン
我が国の漁獲量 ** (最近 5 年間)	16 ～ 186 トン 平均：121 トン
管 理 目 標	検討中
資 源 の 現 状	調査中
管 理 措 置	船上保持禁止 (ICCAT (ハチワレ)、IOTC (全種)) 漁獲物の完全利用等 (ICCAT (※ハチワレ以外)、 IATTC、WCPFC)
管理機関・関係機関	ICCAT、IOTC、WCPFC、IATTC
最新の資源評価年	—
次回の資源評価年	—

*FAO による統計資料（2009 ～ 2013 年）に基づく集計値。

** 我が国主要水揚げ港における水揚げ量（2010 ～ 2014 年）の集計値。